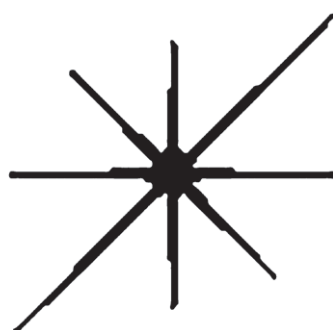


# コメット通信 26

[’22年9月号特別付録]



*comet book club*

éds. de la rose des vents - suiseisha

## 事の端

風薫る五月、採録、我楽多市にて。

桑原喜一

- 「店主 只今 雲隠れ」
- 「衛星塵」
- 「美しい日本の、美しい憲法を美しくつくる、美しい国民の、美しい尾」
- 「変こそが、不変 無常こそが、常」
- 「：：させ・て・いただき・ます」
- 「ウラジーミル、君と僕は同じ未来を見ている」
- 「歴史は繰り返さない 人が蛮行を繰り返す」
- 「戦争犯罪」
- 「政治・経済」
- 「新しい(?) 戦争」
- 「七転び七起き」
- 「電信柱と防犯カメラ」
- 「へみんなちがって、みんないい」と、みんなが言う」
- 「お日様、ブランコに、よっつ」
- 「声のカケラ」
- 「水田変じて、電田となる」
- 「学び舎、伝説にして幻影か」
- 「〈恋唄〉〈散文〉〈余白、に〉」

\*\*\*\*\*

- 「店主 只今 雲隠れ」

(扁額擬き、高野槇柱目に墨書。

タテヨコ2種、計2枚有り。

尚、御所望の方には、代理人による応談、承ります)

コロナ禍とプーチン氏の、渦中であって、そんな物好きはいるだろうか。  
足を止めたのは、今のところ、採録者の私だけのようだ。

なお、店主の名は、雲隠夢才と、聞いている。  
三尾狐とも、自称しているらしい。  
店の名は、雲夢庵とも無才舎とも、三尾亭とも。  
所在地、不明。

□「衛星塵」

(崩れ落ちてくる、天空。  
昔、杞の国の人の、憂い。  
今、  
軌道は 揺らぎ  
いずれば、  
空から落ちる 人工物。  
おお方は 燃え尽きても、  
別の物質に変わって  
中空を  
漂う、だけのこと。  
海にも  
空にも、  
マイクロプラスチック。  
生産性の成れの果て)

雲をつかむような話ではありません。  
すでに、肺胞に、巣作りしています。  
胃や腸に、めでたく、收藏されています。

□「美しい日本の、美しい憲法を美しくつくる、美しい国民の、美しい尾」

(五尾狐ノ会会報。  
吉なるや、凶なるや。  
写しにして、なお、霊力あり。  
入手に渡ると、本文消失)

九尾狐といい、五尾狐といい、奇数には不可思議なる力が備わっているらしい。

□「変こそが、不変 無常こそが、常」

(短冊風、擬似オセロ遊びの、一種か。

仮に、暫しの平常心を保つ為のお呪い、とでも理解して居ります)

むしろ、言い換え遊び。

変こそが普遍・不偏。

無常こそが情・定。

□「……させ・て・いただき・ます」

(「……させていただけます」という、言い回し。

受け取るこちらの舌先からやや奥あたりにも、気になるうごめき。

言い回しの、その真似を想うだけで、微妙に、舌がもつれそう。

気配りという、蜘蛛の巣のような支配網に絡め取られてしまいそう、

とでも、言えばよいのだろうか。

「使用」を強いられるような場面には、心身を置きたくはない。

そう思われるご同輩も、たぶん、おられるでしょう。

「そうなんです」という応答からも、同種の気配は漂ってきます。

声帯の、何かしら、不毛な、震えも兆してきます)

そうなんです、よ。

でも、でも、です。

私は、一度(だけ)、試みます。

私は、一度、使わせていただきます。

何か、ヘンです、言い換えます。

私は、一度、使わせていただきます。

私は、一度、使用させていただきます。

私は、……使う、用いる、使用する。

私は、……聞く、聞いてみる。

私は、……言う、言ってみる。

私は、……させ・て・もらう。

私は、……させ・て・もらいます。

私は、……させ・て・いただく。

私に、……させ・て・くれ。

私に、……させ・て・くれる。  
私に、……させ・て・ください。  
私に、……させ・て・ください。  
私に、……させ・て・ください・ませ。  
（三半規管にも、漣のような漣れが生まれそう、で）  
私には、……させ・て・くれる、な。

□「ウラジーミル、君と僕は同じ未来を見ている」  
（色紙風、紙切れ）

「2人の力で、駆けて、駆け、駆け抜けよう」という〈近未来〉には、彼の人の言う「特別軍事作戦」も含まれていたようだ。「そのほとんど次の刹那」に、あの人にも「核共有」なる魔物は棲みついていたのだろうか。（七月8日、夜、瞑目し、追記。参院選奈良への応援演説日程変更が前日の夕。背後からの爆発音、煙。振り向くと、2度目。凶器は手製の銃、元海上自衛隊員の犯行。宗教絡みといい、以前の所属といい、それにしても、限定的で含みのありそうな、報道。その、はやさと限定に、どのような背景を読み取ればよいのだろうか。大気圏あたりに視点をおいて、瞑目して遠望すれば、バタフライ・エフェクトなる微細な波動ならぬ、もしや、激震の、P・エフェクト。巡り巡っての、「特別軍事作戦」の余波の、余波だろうか。反転し、やがて、引き波として余波は、元が劇薬だけに、震源域をも襲うのだろうか）

□「歴史は繰り返さない 人が蛮行を繰り返す」  
（落とし文、コピーはご自由に）  
物品以外は、他も、ご自由に）

愚行と蛮行を繰り返すのは、人だ。愚行に留まる限り、そのほとんどは、ひとり遊びの余興に近いものに終息してゆく。蛮行に至るや、人々（あちらも、こちらも）を巻き込み、人の世を、狂気、腐臭と残骸で、覆い尽くす。

□「戦争犯罪」  
（雑帳メモ、増殖する殴り書き）

戦争なる語と犯罪なる語が結合し、ほぼ日常的に用いられている。国家テロは犯罪にならないのか。国際法のもと戦争状態における犯罪と見做して、「戦争」と「犯罪」とは別ものなる刷り込みが、暗に、採録者の脳にも棲みついてしまっそうだ。

破壊、殺戮、掠奪、拉致、拷問。  
奪い、奪い合う。  
殺し、殺し合う。

命あるものの宿命、〈食う・食われる〉関係から、生存競争の一つの表れなどと、嘯くわけにはいかない。  
戦争、そのものが〈究極の犯罪〉だ。

#### □ 「政治・経済」

(55年前の教科書。

日焼け、紙の劣化あり。

開くと形が崩れそう)

当時、採録者は、まるで興味も関心も持ちえなかった。教科名は、現在もそのままのようだ。  
国内外の、昨今の、呆れて物言う気にもならない現状に、心はざわつき、衰弱する。

本体は「政治・軍事・経済」ではないのか。昔も今も「軍事」が隠されている。装われた脱落なのか。深謀にして、浅はかな得意技、隠蔽なのか。それとも、奥の手にして手馴れた常套手段、消しゴムで消してからの、改竄なのか。

採録者の私に、その判別は、不能だ。

あれやこれやに、塗されている、脱落や隠蔽や改竄の胞子。

黒塗りにして公開したり、「政治・●●・経済」と印刷されたりして、それが姿を現す、ことはないだろう。

なお、厄介なことに、その姿を誇示したり消したりしながら、「政治・軍事・経済」には、水のような空気のようなものとして、また、ウイルスのようなものとして、「宗教」なるものが、濃淡とり混ぜ、その擬きも侍らせて、あまねく浸潤している。

#### □ 「新しい(?)戦争」

(情報としてもたらされる「画像」に照らして、

隠そうとして 隠し切れない

禍々しくて

酷たらしくて、

「新しい資本主義」よりは、

そのイメージを

確かに伝える力を持ち得ている、語です)

何が「新しい」のかといえれば、両者の、その画像発信に尽きる。情報戦という、その姿もきわめて鮮明だ。片や、

供される武器・弾薬・衛星データ・画像処理技術。戦闘そのものが即座に映し出される訳ではないものの、事が生じた後の「画像」は数日を経ずして拡散される。以前は、戦争の実態のその殆んどが、隠され続けてきた。今や、破壊・掠奪・殺戮の、その痕跡が、日々、映し出される。独裁者に棲みつく妄信は狂信を孕み、育まれた狂気が解き放たれる。区別なく、至るところを戦場とし、さらに狂気は増幅され、現実化する。時を経ずして、事後の、隠しようのない痕跡が露わになる。

デジタル機器による、狂気の沙汰の可視化。

国家から、民間、個人に至るレベルにおいて、馴染みのない名称の片割れも、泡立ち、溢れる。

ワグネル・キンジャール・ジャベリン・スターリンク・サイバーアタック・ディープフェイク・ペリキングキャット。侵略側は、懲りずに、相も変わらぬプロパガンダを垂れ流し、外相は大根役者にして厚顔無恥、その場凌ぎの見え透いたウソを発信する（大根役者・厚顔無恥、これらの文字を、私は初めて用いる、恥ずかしながら）。両者において、はるかに膨大な量としての細々とした情報は、たぶん、隠されている。

#### □「七転び七起き」

（や起き）とするなら、転ぶ前に、一度転んでいることになる。

数が合わない、拘る向きにはお勧め)

再々という背景に照らすなら、七と八程度の差は意味をなさない。

ところで、「敵基地攻撃・反撃能力」の場合も、同様だろうか。

反撃は攻撃の中の一つの形、敵が、瑣末な区別などするわけではない。

事は、纏れに纏れ、複雑になるだろう。

敵の敵は味方、味方の敵は敵、敵の味方は敵。時に、敵の敵も敵、味方の味方も敵。

権力機構の保持拡張者達には、「敵造り」こそが、今なお、常套手段にして特效薬。

効きすぎて、自家中毒に陥ることもあるに違いない。

仮に、正しさを常に信条として対峙しても、自ずと「敵」の振る舞いに引きずり込まれてしまう。いずれ、相手の振る舞いに同期し、泥沼で、許し難い憎しみの矛先であった敵との同化が起こり、似た者同士となる。〈狂気の沙汰の可視化〉における非は、言うまでもなく、機を狙って「特別軍事作戦」を仕掛けた側にある。

#### □「電信柱と防犯カメラ」

（天網恢々、それとも、天網皇帝。

あな恐ろしや、「天網工程」)

何かしら、牧歌的・水彩画的、ワンシヨット。

電柱と表記すると、牧歌的雰囲気は損なわれそだ。好みとしては、何ととっても、電信柱だろう。

電柱とは、「電力柱」。やや撓んではいるものの、ほぼ水平に、鈴なり状態の、送電線・配電線。「電信柱」には、電話線・光ケーブル・ケーブルテレビ用ケーブル。「共用柱」というものもあって、電力と電信を共に受け持つらしい。こうなると、着飾りすぎて、水彩画的という要素も薄まる。

送電線・配電線を除いて、いずれは不要となるのはそれほど先のことではないと言える、だろうか。混迷している、この星のヒトの世の現状を見渡せばムリな話だ、とする方に分がありそうだ。

もう一方の「防犯カメラ」という、その名称からは違和感が、なかなか消えない。

依怙地な理屈だが、カメラの設置で「防犯」を担えるわけがない。良からぬ事を仕出かすのはカメラに映り込む範囲外で、とか、出直そう今は止めようとか、その程度の抑止だろう。設置された「防犯カメラ」が脚光を浴びるのは、いつも、事が起きてからの周囲の画像記録開示、だ。

ある製作販売会社によれば、「防犯カメラ」の働きは、三点。セキュリティ・抑止・監視。

「監視」と、明記している。なかなか用意周到だ。確かに画像の開示は、事が起こるたびに、実績をあげている。ドライブレコーダーにおいても、ほぼ、同じかもしれない。画像記録が、「まともなドライバー」の身心を守る要素を担保してくれる。しかし、そのように受け取ることは、幸なのか不幸なのか。徐々に徐々に、「監視」に対する警戒心を薄めてゆく。

ところで、6月より、「ブリーダー」やペットショップなどで販売される犬や猫について、マイクロチップの装着が義務化「されるという。これが、ヒトに及ぶ、先行形態にならないことを願うばかりだ。

それほど昔のことではない。「異端」や「罪人」と見做されるとへしるしをつける。家畜のように烙印（焼鰻）を押された。手首や腕や首などに入れ墨を施された。ここ数年来、仮釈放者の足や腕に、現在地を確定し得るバンドを装着するという、事案が、話題になっている。

ヒトの世がしばらくは続くとして、権力の（トップ、わずか数人の）構成員を除いて、われわれ（民）である一人ひとりに、「マイクロチップの装着義務化」がある日、「発出」されるのではないかという危惧が、消えては浮かぶ。

さらに、シンギュラリティ（技術的特異点）。

一世紀内か数世紀後か、それとも、近未来か。

泡立つ危惧に、心は吸い取られ、浮かんでいる文字。

AIこそは、

新しい神。

随神は、

ウンカのごとき

極小の、

核ミサイル。

われは、

選ばれし者。

誇らしいしるしを



脳幹に授かって、  
われらは  
奉仕する民、  
新しい神の  
メンテナンスに  
日々 奉仕する民。

「何を言うのか、戯言だ。悪夢や強迫観念の類い、稚拙な、血迷いごとだ」

「衣食住足りて、能天気な痴れ者、め」

「食さえままだらぬ、人々。その姿を、目の片隅に、一瞬でも、入れてみよ」と、たぶん、即座に、切り捨てられるだろう。

それでも、しかし……

それで、済む、

だろうか。

二酸化炭素の濃度上昇、

大統領・総書記・総司令官という名の 独裁者、

変異するコロナウイルス、

P・エフェクト、

在庫兵器一掃セール、

ポトラッチの 変貌か先祖返りか、

これら悲喜劇・残酷劇の終演は、いつになったら、訪れるのだろうか。

政治・軍事・経済の、振る舞いは、人智の制御をすり抜けているのか。

バタフライ・エフェクトに、際は限はない。

劇の終演どころではない。

人新世の終わりの、始まりなのか。

何事が起こるか、わからない。

どんな事でも、起こり得る。

…

彼の国に於ける「天網工程」とは、AIによる顔認証システムらしい。  
マイナンバーカードを、遥に凌ぐ、ことだろう。

□「へみんなちがって、みんないい」と、みんなが言う」

（「みんな」とは、「鈴と、小鳥と、それから私」の三者のようだ。

「と、みんなが言う」となると、はて、「みんな」とは誰のことか。

〈そんな、みんなはイヤだ〉とつぶやく、へそ曲りはいてほしい。  
原作に難癖をつける意図は、代理人には、一切ありません)

原作者には、当然ですが、微塵の責任もありません。

そもそも、子供の王国は、ものが三つもあれば、揺るぎなく成立する。  
ふたつでは、息苦しい。

なお、その住人は、子供大人か大人子供。

王国が、コロコロ変貌しながら姿を表すのは、いつも他人の掌の上。

□「お日様、ブランコに、よっつ」

(漕がれている、ぶらんこ、よっつ。

立ち乗りや、座り乗り。

2本の鎖の間に、太陽、一つずつ。

失われた、児童画の一枚。

お譲りするのは、記憶です)

それぞれに太陽とは、と、リクツで見えて笑っている小学一年の〈わたし〉も、そこにいた。  
リクツでしか物を見ていない愚かさ<sup>に</sup>に恥<sup>い</sup>ったのは、なんと、10数年も、後。

□「声のカケラ」

(「うめがえのちようずばち」

「ザイナーヨーエンザチーリーハン」

「ほーれつらっぱのつーれつ」

言の葉、三片です)

五月晴れが続いています。

雲散霧消、

です。

靄が、

ぼんやりと

姿を隠してくれる、ことありません。

破綻、です。

三尾狐の 片割れ

代理人という、私も

雲隠れしているはずの、店主も

採録者という、わたしも

愛おしくも

哀れな、

一尾狐。

西日に、

その姿を

晒す、

他は ありません。

\*

半ば、謎の破片が、稀に、浮かぶ。

元歌は何だろうと、時に、思いつつも、わたしは放っておいた。60年以上は経っている。

踏切前の、河原に近いゆるいカーブで鳴らす警笛が、時おり風に乗って聞こえ、足尾線の機関車が煙を吐いて動いている頃の、ことだ。

ネット検索という手がある。「梅が枝の手水鉢」「じんじろげ」に行き着く。関連部分を載せる。

「ザイナーヨーエンザチーリーハン」には、辿り着けない。検索不能（うろ覚えのゆえか）。

梅が枝の手水鉢

叩いてお金が出るならば

若しもお金が出た時は

その時や身請をそれたのむ

じんじろげや じんじろげ

どれどんがらがった ほーれつらっぱのつーれつ

まーじょりん まーじんがらちよいちよい

ひっかりこまたき わーいわい

60年ほどの時間は、

70代の身になれば、ほんの一番。

もの心つくところから10才前後までは、

60年先は、思い描きようもない時間。

同時に、死の先にあるような時間。

あるいは、  
遙か先なのか 数歩先なのか、  
見えてはいるようにも思えるのに手は届かず、  
春先の陽炎のように、  
真夏の逃げ水のように、  
揺れ動いていた。

\*

#### うめがえのちようずばち

音源は、縦長25センチ位の置時計、オルゴールの音。その音に、明治13年生まれ祖母（呼び名は「スイさん」だったり、「スエさん」。後に判るのだが、謄本の記載は、「すゑ」「ゑ・エ」と「ゐ・キ」の混同だろうか）は、時おり音に合わせて「出るならば」までを、口ずさむこともあった。オルゴールの音だけでは記憶に残らなかっただろう。声になって「梅」「たたいて」「お金」「出る」と、何となく像につながったのだろう。また、「枝」から「絵」、つまり、梅の枝の「絵」として聞き取ってもいたのだろう。「身請をそれたのむ」まで歌われたら理解不能、記憶には残らなかったかもしれない。因みに、「梅が枝」とは遊女の名前らしい。ゼンマイ仕掛けの置時計は、オモチャ代わりになって、程なく故障し、姿を消してしまった。時おり骨董市に出掛けてみる。残像としての姿形に似た、たぶん大正時代に製作されたであろう、置時計を目にした事はない。

#### ザイナーヨーエンザリーハン

音源は、小学4年の、教室の中。半島が大陸か、どこかの歌と聞いていたような気はする。  
中仕切りを取り払い、机の脚を結えて並べ、教壇を載せて舞台とし、出し物の一つは「裸の王様」でもあった、学芸会というものも、いつの間にか、行事から消えつつある頃。一学年2学級あった2組（6年間クラス替えなしで、37人前後いたと思う）の教室での事、だ。合唱というものには、気後れがして身が入らず、記憶違いかも知れず、ヒットしない。  
お手上げだ。「鶏肉飯（チーローハン）レシピ」なる項目には、巡りあう。  
ついでに、以下、「学び舎」というイメージを育くみ得なかつた背景（「経済成長」なるものの、表にして裏か）について、記す。

小・中・高・大の、それぞれにおいて、校舎の新築に出くわした事。

「小」においては、2階建木造校舎（昭和の初め頃か。4年生までの教室はこの校舎）前の、校庭に、モルタル2階建校舎が新築された。旧校舎（と、何となく好んでいた平屋、転用されたものか。建てられたのは明治か、大正の頃か。2階建木造校舎の東斜め前、一段高い所、なぜか西向き）は、いつの間にか取り壊されていた。より狭くなった校庭の、ブランコや鉄棒、その向こうはやや太い針金のフェンス、石垣の下には鉄路、その下も石垣、護岸、河原。

冬のたるまストーブ、当番制で持ち寄る薪。途中から、石炭の支給となり、焚き付け用となる。2階の教室から見える、裸になった枝垂れ柳の大きな木、その枝先の、風に揺れる、若芽のみどりを待ち望んでいた。ほぼ同じころに給食も始まる。その匂いで、飲み干すが苦手な、ミルク。脱脂粉乳という敗戦国への援助物資と知るのは、後々の事。

手狭になった校庭は、取り壊された校舎の東の農地に、新たに造られた。

同じころか、少し後。冬の遊びの定番としての「おしくらまんじゅう」。団子状態になつての、掛け声（おしくらまんじゅう、おされて泣くな）を反復し、押し合い圧し合い、する。時に（アンボ、ハンタイ。アンコ、クイタイ。アン、ボン、タン）なる、合いの手を入れる。ネタにしていたのは、たぶん、ラジオの音声と新聞の報道写真。（アン、ボン、タン）は、後付けの、ニセの記憶だろう。

50年ほど前、任期一年の新卒地公臨として受け持った4年生の一人が、学年終わりの三月、放課後の砂場で、やや顔を赤らめ、穴を掘って遊んでいた。埋めていたのは、枯れ葉や、紙切れ（稚拙な、人形を描いた）のようなもの。少し間をおいて聞けば、「せきぐんごっこ」と言う。校庭の西方の山並みの、その向こうは軽井沢。この頃、テレビは珍しいものではなかった。ああ、恐るべし、このようにしても取り込まれるのかと、「掛け声」のことを思い出してもいい。

赴任して三月目の中頃の事、校庭に出られない梅雨時、隣の中学の、たまたま空いていた体育館を借りられた。久しぶりに広い空間に躍り出て、数人がステージにのぼって歓声をあげている。その様を目撃して、中学の教頭が言うことには「ちゃんと管理しなくちゃダメじゃないか」。たまたま現れたのか、様子を見にきたのか。そう思うこともなく、「管理」の現実とはこういうことなのかと直感した。以来、「管理」からは可能な限り遠ざかる、が、無意識のうちに棲みついたようだ。

（追記、七月九日。「我々はまだ何も本気では始めていない」と、Pの新たな揺さぶり。

朝・昼・晩、鳴り響く警報音、ミサイルの航跡・閃光・爆裂音・黒々とした煙、瓦礫。

破壊される都市・町・橋・住居。

穴ぼこだらけの畑。

破壊され、錆びた戦車の残骸。

地下室生活。

息をひそめている子供たち、眠りの中にも、それらは、入り込む。

たわいもなく儂い夢の中でも、子供たちの遊びは、奪われている。

命も、いつ奪われるかわからない。

画像を見ているだけの、私。

遠く離れ、ここに蹲るだけの、私。

なんら実効性のない、ひそやかに冷たい、私の、呪詛……。

しかし、声にはしない、文字にもしない

「中」において、旧校舎の前にモルタル2階校舎新築（南向き、対岸の山近し）。

「高」においては、入試を控えた三週間ほど前、昭和39年三月2日、木造2階建校舎2棟焼失。入試会場は近くの商業高校。入学後の一年間、教室は分散し、道路を挟んだ小学校の古びた木造校舎2階に、間借り。翌年、鉄筋コンクリート4階建に、机・椅子を運んで、移る。

「大」においては、学部名は変わっていて授業料は月五百円から月1000円になり（いずれも、変わった年度はいつなのか知りたいたも思わず）、上級生には「学芸・五百円」組がいても、そんなもんかと過ごしていたところにも脳天気ぶりを避れる。ややあつて、封鎖。その次が、校舎移転（数年前から計画されていたのだと思うが）、そんなもんかと、またしてもやり過ぎず。当然、入学時の「学校」は姿を消してしまった。何とか卒業となり、式からは敬して遠ざかり、証書だけは受けとりに行った。

以後、勤め先が「学校」という所であったにもかかわらず、残念ながら、なつかしくてほのぼのとした「学び舎」のイメージが育まれることはなかった。かくて、「学校」「教室」の住人ではあっても、それらを「機能的」「空間的」なものとして感受し、時間だけが流れていたように思う。

鉄とセメントとアスファルト主流の時代であるゆえに、「紙と泥と木で作られた棲家、踏み固めた道」という感性は、しぶとく生き延びようとしているのかも知れない。

### じんじろげ

音源はラジオ。ネット検索のヒット数は、多い。ほんの一部を拾い読みする。一例を転載する。

日本における「変な歌」の歴史において筆頭格、まるで意味不明な歌詞にもかかわらず1961年に大ヒットした「じんじろげ」は、インドが発祥といわれる原曲をもとにした多国籍ポップスの傑作だ。

音源はラジオ、というのには確かめられた。60数年を経て、とりわけ昨今の人の世の有様に、記憶の中で変成し、恥ずかしながら、目の前に「政治・●●・経済」の影もちらついて、その歌詞は、第一次世界大戦ふうな「砲列ラッパの、痛烈」と聴こえてくる。ウクライナは、それどころではない。脳天気も甚だしい。

### □「水田変じて、電田となる」

（拾った紙飛行機の、落書き。

右の翼には「電田変じて廃電となる」とある。

「桑田変じて滄海となる」に比しては、狭小で小粒。

なんとも、せせこましい。

山椒のように、ピリリとはいかない)

古層としての〈子供のころ〉という記憶は、小学生前の、冠婚葬祭の婚と葬が、それぞれの自宅で執り行われていた短い期間と限定できそうだ。

それらは、取りとめもない、うす靄の向こうに漂うような、かけら。

寒村（後に気づくのだが、敗戦国の）にあって、大人たちには、たぶん（一時的に、復活した）ものとしての、不思議と華やきのある出来事。いま思えば、それらのうちのいくつかの共同作業は、自前でありながらも、かすかに喪失感も漂う（おまつり）にも似たようなものであったような、気がする。

幼少期の（子供）には、それらは、言葉にも文字にも成し得ない情景の、かけら。40代になって、よわよわしく浮かび上がる気泡のように、かけらは、何度か、泥沼からその姿をあらわそうとした。

しかし、私は、これはまずいと押し留め、封印した。

今や、老いと共に、封印する力は、ほぼ失せている。

再び浮かび上がってくる、そのいくつかを、私は、名称の網に捉えようとしている。

多分に、後付け気味ではあれ、時の経過ゆえに、許されもするだろう。

以下、思いつく事例を、列挙する。

なお、現在も行われているのは、地藏様（集会所に衣替え）と十二様の祭り（とはいえ、草刈りと清掃を主とする、年に一度の短時間共同作業）と、かつては居住地から一時間余の「ながめ菊人形」祭り。

井戸掘り（見物も、好奇心むき出しで、近づきすぎると、叱られる）

ジャンボン（飾り物、うどん作り。竹で編んだ花籠から、舞う色紙の花びら、振り撒かれる小銭。土葬）

盆踊り（杉の枝に腰回りも覆われる櫓、梯子。設置される簡易放送機器。歩いて行ける区域での）

カーバイト（水、マッチの火。燃える、その光と匂い。沢の上流、マンガン鉱石採掘坑道で使われていた残余か）

お蚕様（産み付けられた卵を孵す。桑の葉を刻み、成長を待つては枝ごと与える。蚊帳の中、蚕食の音）

茶葉揉み（葉を摘み、竈で蒸らす。平たい紙ばりの竹籠の上、炭火の弱い熱を加えながら、手揉みする）

炭焼き窯跡（沢沿いの袖道から少し入ると、潰れて、所々に。炭は、家庭用なのか、精錬用なのか）

薪背負い（小ぶりの背負子<sup>しやいこ</sup>で、山の中腹から道路近くまで運ぶ。駄賃あり。これは卒業前だろう）

田植え（数軒での助けあい、人手、農耕馬・牛も。飲み、食い。後に「ゆい」の一形態と知る、茶葉揉みも）

上空をゆく飛行機（稀に、飛ぶ。あれは朝鮮半島行き、と言う、声がする。混入の一例か）

品評会（出展農産物のコンクール、秋。会場は2階建木造校舎の一階、数教室）

農繁休暇（初秋、子供も手伝う。これは入学後だ）

菊人形（汽車に乗る。人形より、兵隊服の若そうな酔っ払い数人、吐いている一人。ショウイグンジン、一人）

野外上映（緩やかな坂の砂利道に蓆や筵を敷き、座布団を持参して、みる。子供会、青年団）

用水路での遊び（夏の、水浴び、水路の橋渡り。冬の、水柱落とし。水が止れば、トンネル潜り抜け）

てんの様・地藏様・十二様（天王様か、跡地になって久しい。集落の、小振りな祭り。子供には、紙袋の駄菓子）

こじき（入学後には、なぜか、目にしていない。巡り来なかつたのか、校内にいて出会う機会がなかつたのか）

居住地の集落に存続しているのは、先の2例だけ。

「用水路での遊び」の、遊び場あたりは全面改修され、今や、同じ遊びは不可能。ほぼ元の形状であるとしても、同じ遊びをすれば、ひどく叱られ、直ちに「厳禁」となるだろう。しかし、現在、外で「遊び」をするよう

な子供はいない。そもそも「子供がいらない」に、近い。

幼少期にほぼ重なる時期、農業用水路が整備され、「棚田」というほどの景観には成り得なかったが、なだらかな斜面の畑は、順次、方形だけの田んぼに造り直された。それ以前は、湧き水のある所でしか稲を育てられず、畑には、麦か陸稲おしかばだった。旧田と新田の違いは「ドジョウ・オニヤンマ・ホタルがいるか、いないか」で、なんとなく区別がついた。

それから65年余、「後継者がいない、いても年老いた」で、踏ん張っている人はいるものの、「水田変じて、電田となる」に至っている。

居住地の景観が著しく変わる、一度目。上流に多目的ダムが造られ、上流からの転出者をうみ出し、県道は国道になり、砂利道はアスファルト舗装され、風の流れにも多少の変化をもたらした。

一度目以前からの、杉や松や檜の植林による山並みの変容も記しておく。かつて、山肌は、落葉広葉樹とまばらに生えている松や檜や樅の木の、ほぼ九割が雑木林。国道から眺めれば、今や、手入れが充分に行き届かない、6割ほどの人工林（杉が主で、他に、松や檜）に変わっている。春先、落葉広葉樹の、芽吹きの際は小ぶりになってしまった。手入れが行き届かない分、五月、山裾の人工林の端、杉の木に絡みついた藤蔓からの花房が、見事なほどに咲き誇る。

「水田変じて、電田となる」は、2度目で、進行中だ。

国策としての、再生エネルギーへの変換、2酸化炭素排出量削減の数値目標設定。目敏い業者はそれを受け、山の雑木林までを切り倒しての、太陽光発電事業をも勧めてくる。設置経費が少なくてすむ勧めやすい候補地は「道路沿い、電柱がある」のようだ。

ようやく名義変更した私の「元、田んぼ」の耕地面積は、七アール余り。

都会の敷地に比べれば広いともいえるが、耕地としては狭い。

狭いとはいえ、道の脇にも段差の土手にも、草はどこにでも生い茂る。

そして、私の体力は、なかなか回復せず、草刈りもままならない。

「後は野となれ山となれ」は、残念ながら、通用しない。

農地の譲渡金額は10万円。名義変更の手続き代金を充当しない。

このようにして、狭い農地も、設置仲介事業者・設置者・企業を経て、「資本」に吸い上げられてゆく。

## □「学び舎、伝説にして幻影か」

（雑記帳のメモか。）

「学び舎」という語の風情は、何かしら優雅で郷愁を誘うゆえだろうか、受験体制に組み込まれながらも、イメージ造りとして、学習塾や予備校に好んで採用されている、ようです。

10年近く前の事、「学校評議委員」という役も回ってきた。

廃校となって、廃れるままになっている泉小いづみこの、その姿は国道から見え隠れし、他の2校（沢入小さわいりこ・花輪小）



と共に統合され「あずま小」となり、新校舎が、少し離れた中学の北隣に新築されて、既に21年。コンクリートを主体にしつつ、内装には木材を多用している。現代風、都会的でないながら、ゆったりとした造り。天井を設けない広い教室を、2学年で使い分けている。統合されても全生徒数は、60年前の一クラス分にも満たないが、これなら、「学び舎」の像を育くみ得るかも、と、しばしは思えた。

余裕のある造りの階段を2階の教室へと上がってゆくと、蹴込み板に英単語（曜日等）の貼り紙がある。教室内の掲示であるなら許容できそうだが、先取りして小学校から英語を学んでいるとはいえ、通路の壁にも多種の貼り紙があり、設計の意図に（たぶん）反し、児童には意識はされぬ（意識されぬ方がより深く感受されてしまう）ものの、これでは息苦しいのではないかという思いは、今でも消えない。

小会議室にて、懇談の合間、ふと、対面する壁面に目を向けた。選挙ポスターよりは大きそうにも見える、貼り紙がある。私かに、驚いた。各種ハラスメントの、対象を職員に絞った印刷物らしい。啓発の要があるなら、貼り出すまでもなく、同種の内容をプリントして職員に配付するだけでよい。それとも、事態は、掲示を要するほどに深刻なのだろうか。この時点で「声のカケラ」の一つが意識にのぼっていれば、「砲列ラッパのツータツ」と聞こえてきたことだろう。

その日、三点の私見を、ご披露する意欲や老婆心もなかった。

2022年4月、小中一貫校として、4・3・2制の「あずま小中学校」（児童・生徒26人）となる。

建物の運用は熟慮され、小規模校ゆえの「学び舎」の像の種子は、一人一人に、ゆたかに受け継がれ、しなやかに育まれてゆくことを、切に願っている。

（泉小の校舎解体作業が始まるらしい。8月22日、追記）

#### □「恋唄」〈散文〉〈余白、に〉

（三部作、ワンセットのみ。

一発じゃんけん、負けの方に、進呈致します。

但し、現在、取り揃え中。

その節は、ご笑覧あれ）

五月闇、です。

歩き疲れました。

今回は、ここまで、です。

執筆者について——  
桑原喜一（くわばらきいち）

一九四九年生まれ。小社刊行の詩集には、『散文』がある。